

---

# 死亡フラグ回避の華麗な方法～物語の裏で蠢く皇女様血涙編～

ワシワシ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死亡フラグ回避の華麗な方法〈物語の裏で蠢く皇女様血涙編〉

### 【Nコード】

N7136Y

### 【作者名】

ワシワシ

### 【あらすじ】

異世界に転生した日本人、そこは脳筋魔族の蠢く魔界だった！  
強さこそ全て！ 筋肉は正義！ 戦いこそが我が覇道！ 人間気に  
食わぬ 戦争だあ！ の脳筋な魔族の皆さん、勘弁してください。  
戦争回避のために今日も奔走、人界三界から陳情山積み、そろそろ  
鬱になる頃です。常識とは何ですか？ あすも私は生きていますか  
？ 死亡フラグパラメータの上昇を防ぎ、今日も元日本人の皇女は  
死んだ魚の目で生きて行きます。栄養ドリンクのビンがしゃれにな  
らないほど床に転がって……あれ？ 涙で前が見えない……

そろそろ血涙が止まらない

訃報です。

皇女リユの脳裏をそんな言葉が掠めた。

あるいは、『会議は踊る』とも。

本来、『されど、進まず』と続くべきであるが、進み過ぎて、もはやもう誰にも止められぬ。

ここは魔界である。問答無用に魔界なので、そういうものごと納得していただきたい。

魔界の魔王城の一角。

円卓に着くのは、魔族の内、皇族級以外に、各氏族の長が十五名である。

蛇龍の長、九頭竜公デボラ。

不死の長、吸血公メルキオラ。

巨人族、巨人公ヨーガ。

天魔の長、鳳凰公カクラ。

水棲族の長、魔魚カン。

蟲族、蝶公ウリト。

悪魔族、美麗公アスタロト。

ジン族、大食公シエヘラザード。

氷魔族、氷雪公リスタロツテ。

犬狼族、狼牙公シヴァ。

猫魔族、虎公オンサ。

鬼族、剣鬼公パール。

花樹族、花怪公ヒヨウゼン。

邪妖精族、貪欲公アナザー。

造魔族、鎧公グイン。

魔族の有象無象を挙げていけばきりがなが、その中でも特に力を持つ一五公が一同勢ぞろいし、喧々諤々何を話しているかと言え

ば、実にくだらなくも血の気の下がる内容である。

「最近、人間どもが魔界にちょっかいかけてきて、うっとうしいのう」

発言者は見当たらない。

いや、円卓の上に用意された小さな座布団の上にちんまり座っている邪妖精アナザーが発言したのだった。

切りそろえた黒髪に、黒い羽の彼女が邪悪に言えば、あっさりと九頭竜公デボラが扇を手のひらに打ちつける。

天を突けとばかりに鋭い三角錐の緑の髪がざわざわと動いてお察しのとおり無数の蛇である。

「ぶっ殺してしまえばよろしいのですわ！」

よろしくない、ぜんぜんよろしくない、と成り行きを見守っていたリユは心臓がきりきりと痛んだ。

その手元では、便利屋としていつも同席を強要されるままに、自主的な議事録作成している。

きつと誰も目を通さない議事録ではあるうが、会議と名がつく以上は、と発言を記録する。

「あーあれですな。魔界の資源を狙っておるのでしょうか。ま、ちまちまつぶしていくのも面倒ですし、ここは一気に大侵攻といきますかな」

「ぱーっと景気づけに、いいねえ！」

前者は髭をしごきながら一見渋いロマンスグレーに見える吸血公メルキオラ、後者は天魔の長、頭の中身が常夏の鳳凰公カクラが陽気に言い放った言葉である。

ぱーっと景気よくやられては、誠にたまらない。

(どう、穩便におさめよう)

リュはいつそもう何もかもどうにでもなあれ、という気分ではあったが、そういうわけにもいかないことは重々承知していた。

こいつら、その場のノリで、誠に大戦争を始めかねないのだ。

おまけに、世界警察を気取る白竜族どもから、嫌な書簡が来ていて、これ以上魔族が破壊行為を繰り返すようなら戦争も辞さぬというような内容が婉曲どころかストレートに書き連ねてあった。

(私にどうせよと……)

所詮リュは、皇族といえども、継承権なんか下から数えた方が早いよ！ 生母も淫魔族ゆえにたいした戦闘力もないよ！ という別の意味で情弱サラブレッドな皇女である。

しかも、彼女は生前『日本人』であった。

気がつくと、彼女はこのなんちゃってファンタジー世界に転生しており、しかも魔族の皇女などという立場にあった。

幼児のころに、漠然と以前の人格と現在の人格が融合したのではあるが、その感性は、ぶつちぎりで生前寄りだ。

戦闘が三度の飯より大好きな魔族において、ラブ&ピースで頼みますなどという思考回路で生きているリュは、真の意味で異物なのであった。

つまり、この脳筋どもに色々ついていけねえ。というのが、リュの偽らざる本音であり、ついていけなくとも、その無茶ぶりは阻止しないと大変なことになるというのだけは理解できるために、二四時間馬車馬のように働けますかを実践してしまっている。

いわゆる、尻拭いというやつだ。

(うっ、戦争だけは、戦争だけはご勘弁を)

胃の辺りを押さえつつ、リュはこころあいを見計らってゆっくりと口を開いた

会議終了後、執務室に戻ったリュは、どさりと椅子に腰を下ろした。長い黒髪がさらさらと肩に流れて行く。

そのまま天井を見上げ、目の奥から走るきりきりとアイスピックで穴をあけられているような痛みに耐えかねて眉根を揉んだ。

(なんとか、丸く？ まる……くはないがなんとか収まった……)

大戦争だけは回避した。

誰も褒めてはくれぬが、自分だけは自分を褒めてもいいよ！ とリュは自画自賛して余計に頭痛が酷くなった。

空しいばかりである。

ともかく、しばらくはこの手で行こう、とリュは以前に決めたとおりに事を収めた。

すなわち、『弱い人間を掃討したとて、何の手柄にもならぬ。むしろそれを誇ってる奴いたら、恥ずかしくね？』作戦である。

魔族は個々の武勇に何よりも重きを置く。

弱いものいじめをして、勝てて当然の相手に踏ん反りかえっていれば、むしろ失笑される。

そこをぐりぐりと言葉柔らかかに抉ってやった。

しかし、弱い淫魔族のリュが発言する際、魔族のトップたちから向けられる視線のプレッシャーときたら、新しいプレイの境地に目

覚めかねないほどのあれこれそれであった。

(もつやだ……)

リュは半ば心折れつつも、頭痛をこらえて身を起こした。

マホガニー材に良く似た材質の机の上に山積みとなっている書類をじっと見つめ、見ても減らぬのはわかっている、これを崩すためにもまずは手に取ってざっと目を通す。

一通目から、他国から魔族にあてた苦情陳情罵倒遠まわしな脅迫の内容で、気力が無残に折れそうになる。

二通目も三通目も四通目も通常運転で、次第にその紅玉の瞳から、生気の光が失われて行く。

五通目、先日使わした和平の使者が祝賀会で暴れたらしい。謝罪文は手馴れたものだ。国交問題に発展しかねないという懸念はもう遠いところに置いて来た。先方もわかってきている。うん、そういうことにしよう、とリュはさらさら書き付けて行く。

六通目、造魔族ダンジョンメイカーが、また殺人迷宮を勝手に某国の要所近くに設置したらしい。鎧公ゲインに尋ねよう。そして即刻撤去してもらおう。多分人間達を中に閉じ込めてフコ呪法する気満々なんだろうな、と見当がつくだけに、おそらく無理だが、お願いするだけはしてみる。

七通目、某不死公のお身内が、金髪美女ばかり浚ってハーレム作つてるからふざけんなどの罵詈雑言がデコラティブにちりばめられている。メルキオラ公におたくの甥ごさんがハーレム形成しているみたいなんで、ぶっ飛ばしてくださいとオブラートに包んで制裁してもらおう。多分筋肉思考だから喜んで鉄拳制裁してくれるだろう。

八通目、水棲族の姫の銀杯が盗まれた後、人界で呪いを撒き散らしているのを回収依頼。これは……うち、悪くないよね、悪いのは盗んだ奴だよね、とリュは書状をぐしゃぐしゃにしかけたが、まずはあのおっそろしい怪魚殿に事情を伺わねばと思う。

・  
・  
・

百八通目。

その案件を裁いた後、リュは完全に死んだ。

目が。

六通目の殺人ダンジョン。某国の皇太子が乗り込んだまま行方不明だつてばよ。

一度深呼吸した後、優先順位を第一位に繰り上げて、皇太子のくせに冒険者の真似事してるんじゃないやねええええ！ と血涙を流した。豪華パーティで涙が本当に止まらない。

エルフの王女等々も身分を隠してご参戦遊ばしていたらしい。

(貴様ら自重しろおおおおお！)

頭をかきむしりたい衝動と戦いながら、リュは空中を睨んだ。

彼女にしか見えない、パラメータがある。

この世界にぶち込まれた日から、そうと気がついた日から、リュにしか見えぬ数値。

すなわち、死亡フラグパラメータ。

その予測値は、この案件が現行のままの場合、二種混合のパラメータが限界突破することを指し示していた。

ひとつ、魔界以外の魔界への不信パラメータ。これが天元突破すると、勇者とかその他もろもろやつらが同盟を組んで魔界に攻めてくる。



ふたつ、魔界の裏切り者不信パラメータ。魔界には裏切り者がいます。こいつのリユに対する不信パラメータが天元突破すると、裏切り者は出奔して、対魔族ちーとスキルを身に着けた上、リユはぶっ殺される未来が用意されている。

今回は何とか事前に収めたが、魔界側の戦意高揚パラメータもある。この辺の操作は、なんだか手馴れてしまった感があってむしろ泣きたい。

そもそも、何故自分にはこのようなものが見えるのか、全ては妄想なのか。

全ては、リユの知る未来の『予言書』による。

しかし、リユに今後の奇天烈な未来について説明した『ナビゲーター』までいる以上、妄想だとしてもひとつの指標として有益には違いあるまい、とリユは早速に殺人ダンジョンの案件に取り掛かることとした。

## 今夜はイカを食べようか

とにもかくにも、事情を関係者に聞かねば、とリュは最近腰痛気味な気がする重い腰を上げた。

フットワークは軽くを心がけているが、東奔西走したところで、無限に沸き出ずる問題を思うと、この目の前の案件を片付けたところで差し引きプラスマイナス収支マイナスなんですけれど一体何をやっているのだろうと暗黒サイドに囚われそうになってしまう。

軽く頭を振って、リュは一番上の深底の引き出しを開けた。

そこにはみっちりと『今日も二十四時間働けますか！？ 中間管理職の強い味方！ 魔界の愛情ドリンク』が並んでいる。一本引き抜くと、淀んだ目でリュは蓋を回して一気飲みした。

以前は、カツと臓腑が焼け付いて、マグマのような熱が身体中に染み渡るような気がしたが、現在は効き目が悪く、薪を新たに三本くべてみたレベルではない。

リュはじつと引き出しに並ぶビンの頭を見つめた。

「……もう一本いつとくか」

執事の好々爺バアルにはお控えくださいと言われていたが、正直リュは絶賛栄養ドリンク中毒である。

ちなみに、この栄養ドリンク、執事が補充してくれている。月次の棚卸決算を欠かさぬ彼は、魔界簿記検定リンボ級であるが余談だ。白い手の甲で口元を拭くと、何だかふらふらとするような危なっかしい足取りで、リュは執務室をあとに ふと背後を振り返る。そこには『誰もいない』が、リュは一言釘を刺した。

「今は出てくるな」

第三者には、リュが空中に向かって独り言を口にしたかに見えた  
だろう。

リュ自身とて、現在は何も見えぬから、目視でなんとなく当たり  
をつけていっただけである。

(あれの相手をするのは気力が削がれる……)

彼女は今度こそオーク材のような色合いの扉を閉めて執務室を出  
て行った。

「鎧公」

庭園に面した回廊で、黒い甲殻類を思わせる巨漢の姿を早々と発  
見し、リュは今日のラック値は全部使い切ったな、と思った。

裳裾をさばき、リュはすたすたと鎧公グインに近寄った。

鎧公はリュの縦に二倍近く、横は三倍以上、腕も足も丸太のよう  
に太いが、全て甲殻で覆われている。

彼はリュの姿を認めて、挨拶した。

『ギチギチギチギチギチギシギシアンアン』

意識：リュ殿下、何用でござる？

脳内で訳すと、彼は割と理性的に会話してくれるのであるが、故かリュはいつも心にダメージを負ってしまう。脱力してしまう、と言い換えても的を射ているだろう。

他の公に比べればよほど話が分かると理解しているのであるが、なんというか……察してくれ、というのがリュの偽らざる本音である。

リュの精神安寧のため、ここからは、全て自動副音声である。

「公に尋ねたいことがあるのだが、お時間よろしいか？」

「ふむ、某それがしでよろしければ、お付き合いまするが」

「ありがたい。実は、鎧公麾下のダンジョンメイカーのことなのだ  
が」

「何か問題あり申したかな？」

黒色甲殻に覆われた顔面が、微妙に表情らしきものを作った。  
いわゆる、気を揉むような感じである。

「その、な。設置場所に問題があつてな。アシャンティ王国からデ  
イランバークに至るエルフ街道。あの宿場町ダンジョンにな、殺人級の迷宮を  
無断で設置したらしい」

そこまで伝えて、リュは言葉を切った。

じいっと下から鎧公グインの目？と思しきあたりを見上げてみ  
る。

鎧公はしばし沈黙し、首なのか顎なのか良く分からないその節目  
をくきつと曲げた。おそらく、小首を傾げたのだろう。

「それに、何か問題が？」

二人の間を天使が通り過ぎた。

リュは、とりあえず深呼吸してみた。淫魔族としては平均値の胸が大きく上下する。

（大丈夫、大丈夫だ！ 通常運転だ！！）

いつものことである。

国境？ 何それおいしいの？ 領土侵犯？ 土地に名前書いてんの？ 国交問題？ ごちゃごちゃうるせえな。よし、戦って決着つけようぜ！ おおおおお漲ってきたア！

これがごくノーマルな。非常にノーマルな。一般の魔族の思考形態であり、人族との間に深くそれはもう深く深く深淵をのぞくとき深淵もまたこつちをのぞいている的断裂を生む絶対の要因なのである。

何度この嘆きの壁の前に膝を屈したことが！

「ああー、公よ。実はこの殺人ダンジョンに、白竜族のやんごとなき皇太子が素潜りしおったそうだな。その上、きゃつの探索パーティにはディランバーグ氏族のハイエルフの姫などごころごころ王族級が名を連ねて皆そのまま行方不明まいごになっているそうなのだ」

『ほう。それは、見過ごせませんな』

「で、あるう。そこで、救出と同時に、この生成迷宮を消滅もしくは回収して欲しいのだが」

鎧公の賛同に、内心ほつと安堵の溜息を吐いたリュは、鎧公が口も裂けよと『晒った』のに気がついて、思わず半歩身が下がった。

『くくくく、白竜族の皇太子。いかほど強き者でござろうか。道を失っておるのなら、案内がてら某と手合わせしていただく。殿下、

『ご安心召されい』

今宵の我が大金槌は血に飢えておるわ、などと言い出しかねない鎧公に、リユは話の振り方を間違えたと絶望した。

「いや、その、鎧公の申し出、まことにうれしく思うが！ 公の手を煩わせるのは私の本意ではない！ ゆえに！ 私が自身で向かうのでっ、配下のダンジョンメイカー一人借り受けたいのだがっ」

お相手は、無傷で無事に帰してください、などと頼んでも、絶対によいことにならない。子供の使いもできない魔族の皆さん、過去に何度も実証済みである。

半ば声を大きく張り上げる形で主張してしまったリユは、不意に己の肩に違和感を感じて絶句した。

「 貪欲公」

リユの手のひらほどの身長しかない邪妖精アナザーが、ちょこんとその肩に腰掛けて脚をぶらぶらさせていた。その透き通る黒い翅は丁寧に折りたたまれている。

瞠目するリユと眼が合うと、アナザーは切りそろえたいわゆるぱつつん姫スタイルの髪型で、にやりと笑ってみせた。

「くけけ、何やら面白い話しとるのう。わしも一枚噛ませい」

いやいやいやいや、とリユは心中に首を振ったが、話して通じる相手ではない。

「貪欲公の求める宝なぞないと思うが……」

「うるさいのう。ダンジョンメイカーがやらかしたときいて、わし

が引つ込んでおると思うか？ ん？ きやつら本能で穴と穴を縫い合わせてしまうからの、時々とんでもないお宝が断層より生成される。わしの第六感が告げるのよ、この話に乗っとけとな！」

大体外れるじゃないですか、とはリュはとても口にできなかつた。

この貪欲公アナザー、身体はリカちゃん人形サイズではあるが、魔力の精密操作と質量にかけては中々侮れないものがどうか、リュにとっては大体どいつもこいつも自分より強いので、普通に皆恐ろしい。

『ならば、某も一緒に参ろう』

アナザーが同行するとなれば、鎧公グインも一步も引かぬ。

魔界の二大公爵を引き連れて珍道中なぞ、リュは誠に勘弁願ひたかつた。

せめて、目立たぬサイズのアナザーの方がまだしも、である。

「あー、鎧公。その貴公からはダンジョンメイカーを借り受けるだけでも充分ありがたく思うので」

『しかし、白竜族となれば、問答無用に攻撃してくる可能性もござろう。殿下を貪欲公が守ってくれるとは某あまり期待できんのだが』

アナザーを見やると、彼女は『はあー？ 金払うんか？』と可憐な容貌をぐしゃっと歪めて唾を吐いた。

彼女に対価として金銭を支払うのであれば、リュは一日を四十八時間にして働かねばならぬ。

貪欲公はその名に恥じぬ強欲婆なのだ。

すなわち、どうやらまったく彼女のフォーローは期待できぬらしい。そうはいつても、鎧公は目立ち過ぎる。ステルスしてくれるような機微もない。むしろお願いすれば、いくら穏健派の鎧公といえど

も、肉体美を誇る彼に、侮辱ととられるだろう。決闘でも申し込まれたら、リュは裸足で夜逃げするよりない。

大体の魔族が、事後に正気に返って、「かっとなつてついやってしまった。でも反省はしてない」と悪びれず平気で言うのだから、鎧公にもあまり常の理性的判断というのを求めるべきではない。

(正直、この繊細な問題に配下を遣わすのはデスマーチ以外の何者でもない。私自身が行かねばならぬが、紙装甲ゆえ、ボディーガードは欲しい。欲しいが、ボディーガードが暴走しても私は止められぬ。ああ、悪夢が蘇る……)

ジレンマに陥ったリュは、無意識に二の腕を強く胸の前に交差し、肘を抱いていたが、背後からぬうっと伸びた【何か】に、背筋を悪寒が走った。

気づけば、肩に座っていたアナザーはいない。

「貪欲公？」

視線を彷徨させたリュは、正しく次の瞬間全身から血の気が下がる音を聞いた。

(な、何で本気戦闘が始まって!?)

庭園に、黒い半球があちこち展開している。空間の断裂である。

時折容易ならぬ破裂音が聞こえ、激しい戦闘を伺わせる。同時存在戦闘方式 知らぬ間にきつと彼らは【会話】して、どちらかがぶち切れ、たちまち戦闘に突入したのであるが、リュのような弱小魔族には何があったのかさっぱり分からない。

分からぬが、アナザーがわざと【相手】を激怒させようと、声をこちらに反響させたので、何となく概要をつかんだ。



「くけけけけけけ！ ケツの青い小僧めが！ ほーれほれ、わしを捕まえてごらあん！ 頭に血がのぼつとるのー！ ほれほれほーれ、たーっち！」

きゃあ！ などというかわいらしい悲鳴を上げることにはなかったが、リュなりに驚いた。

何の前触れもなく、アナザーが己の胸の谷間からひよっこり顔をのぞかせたためである。

「ふー、金貨の寝床ほどではないが、まあまあ及第点じゃの」

ひとつ風呂浴びたおっさんのように大の字にふんぞり返るアナザーに、何をしているのか、と問い詰めること自体むなしさを覚える。大体、金貨の寝床は硬いのではないか、と聞くこと自体愚問なのではあるが、それに己の胸は劣るか、とリュは妙な悲しみもまた感じられた。

ところで、すでに戦闘音は途絶え、嘘のような静けさが戻ってきたのはいたのだが、鈍いリュにでも肌にぴりぴり感じられるほどに殺気が膨れ上がる。

「くやしいのう、くやしいのう、小僧」

何が嬉しいのか、アナザーは人の胸の谷間に居座ったまま見えぬ誰かを挑発しまくる。多分物凄く悪い顔をしているだろう。

見られないのが残念でもない。

すでに殺気は飽和状態、脚が震えてきたリュはよろめいて転げそうになったところを、背後から鎧公に支えられた。

「ぬ、すまぬな」

『何の』

自然と鎧公を見上げる形になったが、互いに声を交わすか交わさぬかの内、リュの視界はぐるりと反転した。

リュはそれほど慌てはしなかった。

ざわざわと荒れる無数のイカタコの触手の内に絡めとられていたからである。

「 イサーク」

半ば呆れながら、リュはそつと震える触手に五指を触れた。

「お前、本性丸出しではないか」

皇族の一人、粘菌や触手などの不定形生物系統であるイサークは、なんとというか色々複雑な血統で、人種<sup>ヒト</sup>でいえば、従兄弟というのが一番近い。

イソギンチャクみたいに手のひらにおさまる小さい頃から撫で回してかわいがってきたので、リュより遥かに上位種でありながら、何となく気安い感じがする。

イサークは大変器用にも、触手の襞の奥から、舌打ちの音を聞かせてみせた。

『リュ、お前、ババアに好き勝手させてんじゃねえよ』

くぐもった声は、怒りに震えていた。

好き勝手といわれても、あれは不可抗力でな、と言いながら、そういうえばと胸の違和感が消えている。

振り返れば、すでにアナザーは鎧公の頭上に避難して、イサークの無様をげらげら遠慮もなく晒っていた。

ぶちぶちと何か切れる音がしたような気もするが、おそらく堪忍袋の緒が切れる幻聴であろう。

『ババア、殺す』

リュを保護する以外の流動するかのような触手の動きは激しくなり、アナザーはアナザーで「ああん？ やるのか、小僧」と新たに得た騎馬（鎧公）をけしかけようとしていたが、

「そうだ」

とリュは故意に空気を読まず手を打ち合わせた。

「イサーク、お前人化の術で、しばらく付き合ってくれんか」

『あ？』

ぴたりと触手の流動が止まる。

「人界に設置された殺人ダンジョンの撤去と、内部の人命救助に向かうのだが、私一人では心もとない。公お二人が同行に名乗りをあげてはくれたが、鎧公はどうにもその身の毛もよだつ恐怖の巨漢ぶりが人目を引いてしまうだろう」

鎧公はてれてれと頭部を掻いている。

リュには、この辺の感性がまったく分からないが、本人が満足ならそれでよい。

「できれば、ステルスできるお前に同行してもらえればありがたいが……人化でも手乗りイソギンチャク化でもどちらでもよい。私は後者が好きだが、女の一人旅もいちいち面倒が多そうだし悩ましい

ところでな」

受けてはもらえぬか、とかなり本気で頭を下げたところ、イサークは舌打ちした。

『だから、俺はイソギンチャクでにやないと、あ、噛んだ』

しん、と一瞬静まり返った後、アナザーが腹を抱えて鎧公の頭上で大爆笑し、巨大なひっくり返ったイソギンチャクであるところのイサークはぶるぶると巨大な本体ごと震えたが、とにかく鉄は熱いうちに打て隙を与えぬことが肝要であるとリュは重ねた。

「嫌か？」

断られたらそれまでとは思ったが、できれば友好関係にあつて、リュを誤ってぶっ飛ばしそうにないイサークが適任だ。他はなんとというか、戦闘に夢中になって、【うっかり】をやらかしそうで怖ろしい。

うぞうぞとイカタコな触手をよじれさせながら、イサークはその襞奥からもそもそ喋った。

『…………い、嫌じゃない』

いく。

と尻つぼみに答えた巨大イソギンチャクに、もう耐えられぬとアナザーは鎧公の頭から滑り落ち、海老反りになってのた打ち回っていた。

しまいにはびくびく痙攣していたので、よほどツボに入ったらしい。

イサークは怒髪天を衝いていたものの、戦闘にまでは至らなかつ

たので、リュはかなり胸を撫で下ろした。

## 今夜はイカを食べようか（後書き）

### 【一時パーティ編成】

・交渉者兼<sup>ネゴシエーター</sup>??? リュ・リュリュリュ以下略

特筆すべき項目：元日本人で日本食が恋しい。紙装甲。栄養ドリンク中毒。三千世界の中間管理職不憫属性（世界によっては不幸属性）。イサークがいると不憫値が減る代わりに別の隠しパラメータがぎゅんぎゅん上昇するぞ！

・イソギンチャク<sup>バイサーカー</sup>狂戦士 イサーク

特筆すべき項目：イカタコな触手うごうご。手乗りイソギンチャクで限定魅力度UP。人化もできるぞ。幼生時に撫で回され過ぎて取り返しのつかぬシスコン。残虐性もそれなりだが、本当の口調はもっと幼いぞ！

・邪妖精<sup>アンシューリー・コート</sup> アナザー

特筆すべき項目：地獄の吝嗇家。金貨が大好き。邪妖精繁殖とは別に、五百年に一度妖精の中から生まれる特別な邪妖精。他人の不幸で飯が美味い。混乱状態にないのに、味方売り飛ばしたりはめたりするぞ！

・ダンジョンメイカー ????

雑感コメント： バランス崩壊も甚だしいよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7136y/>

---

死亡フラグ回避の華麗な方法～物語の裏で蠢く皇女様血涙編～

2011年11月22日04時23分発行